

和歌：文苑

著者	?本, 植, 杉山, 富槌, 下山, 陸治, 矢野, 太郎, 石橋, 愛太郎, 宇衛, 滋賀, 爲古
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 3
ページ	4 0 - 4 3
発行年	1895-01-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/4523

聞征清軍捷報有此作 次平戶井上先生所寄孫韻

秋月 胤繼

海洋嶋戰信空前。敵艦沈摧已失權。西北二
門望風潰。天兵一舉動全燕。西門為旅順口、北門為九連城、海洋嶋之

激戰、我軍大勝、二門相次陷落、故及。

梧園先生曰全國陷落蓋非遠

又

王師所向已無前。清國存亡在我權。彼若頑
然猶更抗。壓摧禹域况幽燕。

又曰全篇美玉無瑕

歲晚懷遠征

一自征清出六師。一瞬忽忽日月馳。兵馬倥
偬年云暮。長嘯按劍騁遙思。聞說北地寒威劇。
朔風吹雪肌膚劈。可知從軍將士艱。家人相
依憶遠役。誰識神州壯男兒。鉄心石腸。颯
姿一身殉國輕。於絲馬革包屍固所期。醜虜
舉竟鼠輩耳。天兵一降悉披靡。聖明天子錄
戰勳。日夜肝食勞將士。嗚呼國民由來浴至

仁努力奉公在此辰。陽雪轉戰苦則苦。身後
應列元功臣。

除夜

寂寂幽齋靜似禪。流光一瞥箭離弦。梵鐘百
八聲將盡。獨對殘燈猶未眠。

梧園先生曰平穩而帶悲韻

又

光陰如矢歲華遷。心緒紛紛轉悄然。孤客不
眠夜。將盡殘燈影裏送殘年。

雪夜憶遠征

愛日居主人

朔風吹斷凍雲籠。夜雪霏々一望中。想見外
邦征戰士。苦寒益烈氣增雄。

送某君之清

蹶起慨然企遠征。勇心勃々騁燕京。喜君載
筆從軍旅。他日應期班馬名。

寄海祝

助教授 黑本植

波をさへこまもろこしの荒儀に

うちよする君かよものうら風

全

杉山 富樫

宇 衛

治まれる御代のしるしかよる波の

あまあらぬまはたの影のたちわたる

四方のうらわの音しつかあり

ことまの御代の春のうなはら

またつみの沖の汐あひ君か代と

元旦によめるが中の一つ二つ

けふは音さへしつかありけり

外を攻め内を守る君か代の
春の心のたちまざるかあ

全

下山 陸治

いつこどもはてまもわかぬ海原を

赤さけの赤き心をさへけつゝ

君かめくみのふかきとや見む

大君の御旅れもへは何らあらむ
れやのよはひをまつろいはゝむ

全

矢野 太郎

またのはらはてなく波のをさませる

ことしよりいよゝ學ひの園にたふる

君のみよころうれしかりける

智恵のやち草つみやらさねむ

全

石橋愛太郎

磯馴松根をあらはして君か代は

これはおのが子どもによみて遣しゝ
あり

つくしのうらに波もよせこす

二日の朝見性寺に詣でゝ亡父か一
周忌の法會を行ひけるに、

波立ぬ海のうゝみに萬代を

あきおやの爪のささまて目にみえて

いはふ御國の御代ろうつろふ

また袖ぬらす法の庭かあ

妻よりの歌にふれて同しく

時しも大般若經をきゝしが、いとた

ふとく、ありかたくたもひて、

わやの日にきてありわたる般若聲

きくとはさてもたもひかけきや

その後、妻の方より、御法會をあるは

れしよし、定めて御老父さまも、御悅

にたはさんかし、おあたにも、二日に

は、龍源寺の和尚をむかへて、讀經を

ろちへ申しき、去年の春は、まだ雜煮

ちと奉りて共に祝ひし、父上の、今は

はや面影ばかり残り給ひぬとおも

へば、ひたすら浮世をたもひやられ

て、去年のけふどもに祝ひしたらち

ねのことしの春にあはぬとやれも

ふ、といひおこせしらは、またも涙ぐ

まるゝまゝに、よみて遣はしける
面影のうつるかゝみの去年のけふ

おもへはくもる目よあまだかな

新年

下山 隆治

この春は更けてかゝやくあさ日影

こまもろこしも日の本にして

年立かへる朝我占領地を思ひてよ

める

からき世のうさもわすれて唐人も

更か大君の千代や祝はゝむ

寒夜征清ある哨兵の苦を思ひやり

て

抜きもてる及もこほる夜あらしに

たちあかす身をたもひころやれ

ひろしまのかりみやを遙かにおろ
かみて 滋賀 爲吉

すめくにのみいつも君かみめくとも

いやひろしまのみよよあふかな

めいち二十七年のくれんどしける

日よめる

あらたまのとし立かへるあしたより

けふあらんとはれもひかけしを
今さらにをしくもあるかあねほろたに

あにこゝろあくすきしつぎひの

こま

つくしちのあろのをやまにたつけふり

おもはぬかたにあになひくらん

喇叭卒

ふくこえはたえくゝあからまこゝろの

いたらぬくまはあらしとる思ふ

ゆめに

ふりつもる雪のあかなるくれたけの

はつかにたゆむれもひたになし

冬曉思遠征之兵士

溪川 學人

大君のまけのまにまに

まつろはぬ醜のねみまを

打ちきため打ちこらさんと

親にまわれ

妻子にはあれ

風さまゝ諸越原に

太刀はきてぬる人々は

君の爲めこの身惜しどは

誰人も思はさらめど

今夜しも月の光の

いとさむくあはれいかにと

思ひつゝ夢も結はず

あかつきの鳥のあぐねに

れどろきて臥戸出つれば

散りのこる櫓のかれ葉に風見えて

庭の草木はことごとくに

眞白にありて霜をおきける

冬の初つらた行軍中大村社前にめ

つらしく櫻花の咲けるを見て、

草芙蓉

あどさへ々